

「現地を訪問して想うこと」

寺井正人（2016年、法務研究科）

1. 遅くても来てよかった

その日、私は東京の会社で大地震に遭い、スーツの群衆にまぎれて10キロを歩いて帰宅しました。家にたどり着いたのは夜10時。倒れた家財を尻目にTVを付けると、あの恐ろしい映像に釘付けになりました。

あれから5年半。もっと早く来るべきだった、と言うのが今日（2016年11月5日）の正直な感想です。

とはいえ。何度も写真や映像で繰り返し見てきたあの光景が、今、目の前に広がる光景と重なるのを感じた時、遅くても来て本当によかったと思いました。

そして、目の前に広がる、穏やかで、青く輝く海を見ていると、いまだ見つからない多くの行方不明者のことが思い起こされ、なんとも不思議な気持ちになりました。偶然にも、今日は、「世界津波の日」だということです。

2. 教訓

被災者の方のお話しを聞く機会を得ました。私が得た教訓は、人間はこんなにも恐ろしい目にあっても、時が経ち、世代が替わると忘れてしまうのだということ。そして、それでも何とか教訓を残そうとする先人達がいる、今回の津波でもその教訓を生かした人々がいたということ。

今回の津波は、人間が、動く映像というリアルな方法で記録を残した初めての大津波です。今度こそは、時が経ち、世代が替わっても、多くの教訓が生かされることと信じます。

3. うれしかったこと

あの津波の後に卒業し、ここ三陸地方の市役所で働く“九州”出身の卒業生がおられ、そのバイタリティと献身に、まず驚き、そして何より力強く感じました。立命館の未来も、ここ被災地の未来も、ともに明るいと思える一番うれしいことでした。

4. やっぱり来てよかった

南リアス線の列車内で受けた説明では、三陸鉄道社員の方からこのような話がありました。

「このように被災地を見学する特別列車が走っていると、見ている住民はそれと気が付きます。そして、被災地を忘れず訪ねてくれる人がいると分かるので、ただそれだけで、被災地の人たちを喜ばせることができます。」

これは、ぜひ多くの交友にも伝えたい言葉と思い、ここでご紹介させていただきます。